

内藤 真理子（関西学院大学日本語教育センター）

1. クラス概要

本科目は、大学院に在籍する留学生を対象とし、春学期・秋学期それぞれ週1コマ開講している。言語コミュニケーション文化研究科の前期課程に在籍する留学生は必修科目であるが、他の研究科の留学生に関しては選択科目である。本年度春学期の受講生は言語コミュニケーション文化研究科7名、社会学研究科2名、商学研究科1名であり、全員前期課程に在籍していた。一方、秋学期は経済学研究科の後期課程の院生1名であった。本科目の到達目標としては、前期は「修士論文を書くための基礎を身につける」とした。秋学期も継続して受講する学生がいると考え、春学期はあえて「基礎」を掲げたが、実際には継続生はいなかった。秋学期は受講生に合わせて「論文の推敲能力を高める」を目標とした。教材は、主に教員が作成したものを利用した。

2. 授業内容

春学期の授業では、初日に卒論の概要を書かせ、提出された文章から修士論文執筆までに習得が必要だと判断した基礎的なこと（書き言葉、句読点の打ち方、記号の使い方、読みやすい文の長さ、首尾一貫した文の書き方）を授業の前半で扱った。後半は、論文執筆の際に役に立つと考えられるマイクロソフトのワードの機能やウェブサイトの紹介、要約の練習¹などのほか、他の科目で書いたレポートのピア・レビューを行って文章を客観的に見る目を養うことを目指した。秋学期は上述したように、受講生が博士後期課程の院生一人であったため、投稿論文や奨学金の志望理由書のピア・レビューの他、受講生の希望でマイクロソフトのワードの便利な機能の紹介を行った。

3. 成果と今後の課題

学期開始直前まで受講生が確定しないため、事前に綿密な授業準備をすることができないことが本授業の難しいところであるが、春学期に前期課程の受講生が集中し、秋学期に継続して受講することはほとんどないようである。よって、今後は、二学期をとおした授業設計ではなく、一学期で考えたほうがいだろう。また、秋学期の受講生は予測がつきにくいいため、大まかなシラバスを複数準備しておくとうい。

¹ 使用教材：戸田山和久（2002）『論文の教室：レポートから卒論まで』NHKブックス、名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校国語科（著）・戸田山和久（執筆協力）（2014）『はじめよう、ロジカル・ライティング』ひつじ書房